

沖縄の一女性の戦後生活誌

—捕虜収容所から始まった少女の生活記録—

嘉納英明*

Postwar Life of one Woman of Okinawa

KANO Hideaki*

◇はじめに

1) 平良家の長女・初子の戦前の暮らしと戦時体制下の学校教育

本稿で紹介する嘉納(旧姓平良)初子は、執筆者の実母である。初子の出身地は糸満市与座であり、父・平良次郎と母・芳枝の三男三女(長男・宗芳、長女・初子、次女・静子、三女・栄子、次男・宗潤、三男・宗稔)の長女として、1932年(昭和7)7月に出生した。沖縄の多くの生活者がそうであったように芳枝の生活も貧しく子育てと農作業におわられた日々であった(芳枝の生涯については、平良宗芳・宗潤・宗稔編『わが家の沖縄戦・戦後史 芳枝85歳の夏』あけぼの印刷、1989年が詳しい。なお、同書は、元高校教諭の平良宗潤(歴教協)が芳枝を中心とする家族からの聞き取りや地域調査をもとに構成したものである)。初子の幼少期の生活も相変わらずの貧しさが続き、就学前から出来る限りの家事労働をしなければならなかった。貧しさの中にも家族の団らんがあり、小さな幸福感を味わっていた初子であったが、次第に戦時体制下の学校教育の影響を大きく受けるようになる。つまり、学校が戦時体制に組み込まれていくなかで、初子も「少国民」として錬成されていくのである。

戦時体制の世で「お国を愛しお国のために役に立つ」ために、初子は御真影に最敬礼し教育勅語を暗記し、中学年以後になると合同訓練・行軍、勤労奉仕を経験していく。こうして初子は、模範生として期待されるが、やがて沖縄戦に巻き込まれ、敗戦を迎えた。初子は、当時の戦時体制と学校教育を振り返り、「あの戦争は間違いだった」と述べる(拙著「沖縄の一女性の学校生活誌—戦時体制下の教育を中心に」(柿沼昌芳・永野恒雄編著『愛国心の研究』批評社、2004年、所収)。

2) 初子の戦後生活の始まりと本稿の目的
沖縄戦の終結後、初子とその家族の生活の再建はけして平坦なものではなかった。一家の大黒柱であった、父・次郎を沖縄戦で失ったことが残された家族の生き方に大きな影響を与えた。家族が次郎の死を知ったのは、捕虜収容所先である。夫・次郎の死を親戚から聞かされた芳枝は、初子に「自分たちだけが家族を失ったわけではない。戦世だから仕方ない。」とつぶやく。芳枝は次郎の死を覚悟していたともとれる発言である。その後、初子の学業は沖縄戦で中断し(正式には小学校卒)、長女であるという理由から、初子は芳

*琉球大学教育学部附属小学校

枝と共に家族の中心として働き、家族を支えることを期待されたのである。

本稿では、敗戦直後の沖縄の絶望的な状況の中で、初子が捕虜収容所を経て、家計を支えるためにいかなる生活を送ったのかを本人の証言（聞き取り：2005年11月～12月）を上掲『芳枝85歳の夏』及び関連資料とつきあわせることで、事実関係を確認し、沖縄の一女性（少女）の戦後生活史の一断面を浮き彫りにすることを目的としている。沖縄女性である芳枝から初子へと2世代にわたり生活史を綴ることは、戦前―戦中―戦後の激動の時代の中で沖縄の庶民の生き方をあらためて刻み込む作業であるとともに、庶民の生き様を次世代に伝える教育的な意味を持っている。今回、一女性の立場から沖縄の戦後をどのようにとらえているのか、その肉声を伝えることで、今後の沖縄女性史研究の一資料となりうるものとする。なお、本稿では、初子の捕虜収容所生活から結婚直前までのほぼ10年間の生活を中心に綴ることとする。この間の生活は、初子にとって最も不安定な時期であるとともに、10代から20代にかけての象徴的な経験の集積であるからである。

◇1945年（初子13歳）―捕虜、そして収容所生活の始まり

沖縄戦突入前、芳枝は、夫の次郎を防衛隊にとられ、残された家族の命を守るため、大きな選択・決断を迫られる。芳枝の選択・決断は、長男を宮崎に疎開させることと自分を含め子ども五人の国頭への疎開である。戦中、芳枝は長女の初子から乳飲み子までを引き連れて山原に戦禍を逃れて避難し、山中で避難生活を送る。しかし、配給の食糧は底をつき始め、餓死寸前で下山、捕虜となるのである。平良家で初めて米兵に目撃されたのは、次女の静子であり、続いて家族全員が捕虜となった。捕虜になった時の状況について、『芳枝85歳の夏』では次のように記されている。

〔静子の証言〕 東村の有銘に出て、日中も隠れ

たりしないで歩くようになっていた。捕虜になったのは、久辺小学校の小使室。大きなアメリカ人が四・五人銃を突きつけておいで、おいでした。「向こうに母ちゃんがいる」「母ちゃんがいる」って方言で叫んだら、母ちゃんも初子も一緒に手をあげて来た。ペンキで何か字を書いていたが、ここに何人いるとか書いたんだろう。しばらく後に連れに来ていたから。門の所に出なさい、出なさいとみんなを集めて、トラックに乗せた。アメリカ人は初めて見るが、顔は真っ赤で体が大きくて、今の外人とは違っていたように覚えている。(97頁)

〔芳枝の証言〕 久志の小学校で小使室のような所を見つけたので、しばらくここに落ち着くことにして、初子と食糧を探しに出かけた。静子が下の妹弟と留守番をしていると、偵察のアメリカ人に発見され、「見つかったよー、捕まったよー」してワーワー泣いていた。「アイエナー チャースガ（もう、どうしよう）捕虜とられて」と思っていると、校庭に出ろという。いよいよ殺されるのか、どこへ連れて行かれるのか、わからない。(95頁)

米軍トラックに乗せられ連れて行かれた場所は、宜野座村宜野座の捕虜収容所であった。米軍は占領地域を拡大していくごとに、保護下に入った住民を臨時に設けたキャンプ（収容所）に輸送した。一般住民の収容所は、沖縄本島に11ヶ所あった。平良家が収容されたキャンプは、そのうちのひとつである。初子らは、1945年（昭和20）6月25日から翌年の2月頃までの間、収容所生活を余儀なくされ、その間、収容所内で3回住居を移動させられている。収容所内のテントは簡易だが大型である。テントには敷物はなく、土の上に枯れ草や枯れ葉を敷き、その上に寝たという。平良家が捕虜になった時、テントは3、4棟であったが、その後、急速にテントが建ち始め、収容所内の人口は急増する。収容所のテントだけでは捕虜の収容が間に合わず、捕虜自身が茅葺きの家を建てるため、茅を取るために山に入った。一方、収容所といえど

も生活環境はけして衛生的とはいえず、また、配給の食糧も十分ではなかったことから、死亡者は続出していったという。初子は、当時の状況を次のように述べている。

ひとつのテントには、七、八十人はいたと思う。だんだん、避難民が収容所に集められて来るので、テントだけでは間に合わない。それで、収容所の人たちが山に入ってヤンバル竹をできるだけたくさん手に持って、それでカヤブキの家を作った。男たちは、家の骨組みを作って次々に家を何軒も建てていった。また、毎日のように死亡者も出てきてタンカに運ばれて出されていった。配給だけでは足りなくて栄養失調になったんだと思うよ。母ちゃん（芳枝）が一時、脚気や夜盲症になったのも、栄養が足りなかったからだよ。水も井戸水を汲んで使っていたけど、衛生的じゃないから、私も下痢をしてね、結構それが続いたさ。

同じカヤブキに住んでいた四世帯全員が食中毒を起こしたことがありました。幸いにして、隣のカヤブキに住んでいた中頭の人が豚の油をなめさせたので、全員助かりました。そこで、また、小さな弟たちがハシカにかかり、いとこの子どもたち2人が亡くなりました。

末の弟は、宜野座の収容所に来てから6ヶ月になったけど、母ちゃんは乳が出ない。それで小さいイモを2、3個、空き缶で炊いて妹と2人で指でつぶしてあげていました。食べる物がない時なので、5歳の弟が「イモの皮は僕にくれよう。」とずーっと小さい弟の側で見っていました。

劣悪な環境の収容所生活であったが、弾に撃たれ、戦争で死ぬという恐怖感は初子の中から消えていた。不十分ではあったが、収容所での配給物資は、「何とか今を生きている」ということを実感させるものであった。特に、戦前・戦中、「鬼畜米英」と教えられ、米兵を鬼のように考えていた初子は、意外にも収容所生活で米兵の別の側面に触れることになる。当初、捕虜の前に登場する米兵は、“紳士的”であるが、後述するように、収容所内外で婦女子に対して暴行を加える怖い存在に

なるのである。

鬼のような米軍と教えられてきたのに、実際は、親切でした。まず、朝一番に1日分の配給がありました。1人分の食事は豆の缶詰とビスケットの缶詰1缶ずつでした。今のポーク缶詰を開けるように小さな缶切りがついていた。丸い形をしていたさ。竹の枝を折って箸を作ったよ。私たちの家族分12缶、1日分の米は、赤ちゃんの分まで1日1合を与えてくれました。缶詰は開けて、切り身を分けたりしました。米は配給があったのに、ナベがないので、病院のチリ箱をしているバケツを取ってきて、ナベ代わりに使いました。もちろん、調味料なんてありません。海に行って潮水を汲んできて雑炊を炊いて四世帯分を作りました。食器もないので、缶詰の空き缶を使ったけど、そのままだと熱いので、手の平に布地を持って食べました。

一方、収容所近くで強姦事件が多発するなど、婦女子にとっては安心して住める場所ではなかった。大城将保（沖縄戦研究者）は、収容所内での米兵の犯罪に関して次のように指摘し、初子も収容所内での強姦事件を知ることになる。

当時、各地の収容所では敗残兵が潜入して住民に危害を加え食糧を徴発していく事件が散発していたし、また、農作業中の女性が白昼米兵によって暴行されるという事件は日常茶飯事になっていた。夜は米兵の集団がテント村をおそってきて“娘狩り”を繰り返していた。米兵が襲ってくると、住民は酸素ボンベの鐘を打ち鳴らして女たちを逃がした。（大城将保著『改訂版 沖縄戦』高文研、1988年、145頁）

収容所の近くで若い女の人が米兵に強姦されたことがあってね。その若い女の人は収容所の広場みたいな所に連れられてきたんだけど、眼をきよろきよろしてて、下半身は血だらだらして、かわいそうだったさ。みんな、「アイエナー、アイエナー」してね。夜になったら、若い女の人はアメ

リカーに連れて行かれるからといって、誰もテントから出て行かなかったよ。怖くてね。宜野座の収容所から出て、名城でテント生活した時にも、黒人のアメリカ人が若い女をつかまえて乱暴すると聞いていたから、みんな怖がっていたさ。

収容所内での生活は、配給物資を受け取るだけではなかった。共同作業と呼ばれた“強制労働”に従事することがほぼ毎日義務づけられていたのである。主な共同作業は、近くの山に入り、茅を集めることであった。作業に参加すれば、対価として一杯分のみそ汁と豆入りの握り飯がもらえたという。芳枝と初子は、幼少の妹弟たちのためにも、“握り飯”が必要であり、共同作業から手を抜くことはできなかった。また、時折、芳枝は薪取りや井戸水を汲み、初子は、次女の静子と一緒に収容所近くの田んぼに行き、カエルを捕獲し、家族の食料を調達してきた。蛙の皮を剥ぎ、足の股を炊いて食べたという。蛙は貴重な蛋白源であった。

◇初子13～14歳頃—名城・国吉の生活難

1946年（昭和21）1月、宜野座の収容所内で次女・静子の13祝の後、平良家は、真壁村（後の三和村）名城へ移動する。出身地の与座に帰ることを期待していたが、同地は禁止区域で入ることはできなかった。同年5月頃まで名城での生活は続いた。テント生活とイモ堀作業、海水を汲んで大鍋に移し炊き込んで塩を作る毎日であった。初子は14歳になっていた。その後、高嶺村国吉に移動した平良家は、毎日、国吉から与座の畑（私有地）に通い、農業を始めた。相変わらず、与座は住居禁止区域であったが、農作業だけは許可されていた。初子は、芳枝と共に（芳枝の）実家の荒れ果てた土地を耕し、イモを植え、田んぼには稲を植えて米の収穫もするようになった。食うや食わずの毎日が続いていた頃、芳枝の甥・姪らがフィリピンから引き上げ、平良家に身を寄せるようになり、これまで以上に食料や水の確保が大切になってき

た。初子は、当時の状況を次のように語っている。

食料も十分ない時代だったので、私は雨の日も毎日イモさがしに与座まで行っていました。その頃の家族は9名になっていましたので、その食料をさがすだけでも大変でした。水道もない時代だったので、国吉川まで行き、一斗缶のふたつを担いで、一日2回汲んでいました。妹たちや弟たちはまだ小さいので、母と二人で食料を集めるのに一生懸命だった。母ちゃんが体調をくずして寝込む時は、私一人で働かなければならなかった。

元住民は与座に入ることができなかった。旧高嶺村が米軍の弾薬集積所であったためである。そこで、村は役所を民家に設置して、集積弾薬の撤去作業隊を編成し、1947年（昭和22）7月から11月まで作業を行った（『島尻郡誌（続）』編集委員会『島尻郡誌（続）』1977年、779頁）。初子は、農業に従事する一方でこの集積弾薬の作業を始める。大の男に混じって大型トラックに乗り、東風平の港川での作業である。軍船に弾薬を運ぶ危険な作業であった。『芳枝85歳の夏』では、次のような記述がある（156～157頁）。

大里から山や空き地にいっぱい弾薬が置かれていた。共同作業でそれを片付けるまでに時間がかかった。初子は母親代わりで大人並の仕事を買たちに混じって港川まで共同作業で行った。このとき手に入れた弾薬を包んである生地を使って洋服をつくったり、空き箱を水タンクにしたり、種豆入れに使ったりしていた。機銃弾を包んである布は重宝で、糸をほぐしてシャツやスカートにしたり、つないでワンピースやズボンにしたり、いろんな物に使った。

弾薬の撤去作業は、米軍が強制的に地元住民に課した共同作業・奉仕作業であり、当然、対価として賃金や物資が支給されなかった。国吉時代の初子は、米軍の作業をしながら、農作業を細々と続け、食糧を確保するための毎日であった。

◇初子14～15歳頃—学校を諦め、家族の生活を支える

初子は小学校の頃、学業に対して真面目に取り組み、後年、小学校教師になることを希望していた、という。それゆえ、小学校卒業もままならないうちに、沖繩戦となり、学業の道は途絶えてしまったことは至極残念であったと思われる。初子が戦後、学校教育にふれる機会は2度あった。収容所内での学校教育であり、もうひとつは、国吉在住時代のジュニアハイスクール生としてである。前者は、まさしく青空教室のことであり、初子は、時々出席したが、収容所内での厳しい食料事情のため、中途した。後者のジュニアハイスクールは現在の高嶺小学校内にあった。芳枝は当時の状況について次のように述べている（『芳枝85歳の夏』157～158頁）。

国吉にいる頃、一時だが、初子も学校へ通った。校舎がないから午前・午後に分かれていたが、初子は午後からジュニアハイスクールに行った。戦争で校舎は全部壊されて、アメリカンがおいてあったコンセットを使っていた。馬小屋校舎にはマシンが置かれていたので、芳信が学校へ勤めるようになってからはときどき当番の夜「使っていいよ」と使わせてもらっていた。

いつも畑仕事に連れて行って、学校は行ったり行かなかったり、同級生も行かなくなったせいもあるが、学校をやめさせてしまった。神谷ヨシ先生が何回も家庭訪問をして、糸満のハイスクールに行かさなかって、相談に来ていた。初子は学校へ行きたかっただろうが「これがないと、いも堀りもない。家を見るのが出来ない」と断った。初子も諦めていただろう。

戦前、初子の5年生の担任であった神谷ヨシ教諭は、戦後、教壇に復帰した。神谷教諭は、数度、芳枝を訪ね、初子の進学を勧めた。神谷は初子が学級の級長や合同訓練の全体指揮者として活躍していたこと、また、健康優良児として糸満で表彰を受けたりしていたことを知っていたからである。それで初子の進

学を強く勧めたのであった。初子は当然、中学・高校への進学を希望していたが、家庭の経済状況はそれを許さなかった。初子は、断続的・断片的にジュニア・ハイスクールに通うことができた程度であるが、それでも初子にとっては、戦後の民主教育に触れる機会でもあった。学校で学習した内容についてほとんど記憶にないが、「戦前の日本は男尊女卑であった。」「戦後は民主主義になった。」という“言葉”だけは憶えているという。戦後の民主教育を正規の学習内容として受ける機会は初子にはこの後二度となかった。小学校卒の初子にとっては、読み書きに関わる能力は、その後の生活経験の中で自ら獲得していかなければならなかった。

◇初子16～20歳—道路作業・住み込みの家事手伝い・洋裁学校

1948年（昭和23）6月、平良家は国吉から与座へ移動するが、与座川水源地が米軍に接収されていたため、旧屋敷に立ち入りできなかった。この頃、旧高嶺製糖工場敷地の分割・買収が行われ、初子は、「412番地の50」をくじ引きで当て、共同作業で規格家を建築した。2×4の木造住宅である。初子はしばらく、自宅から道路工事の作業に精を出すことになった。道路工事の給料は、初等学校教官補をしていた長兄のそれよりも多かったため、芳枝はずいぶん喜んだそうである。

宮崎に疎開していた兄さんが帰ってきて、その後、小学校の教員になりました。兄さんの給料は安いので、私は、道路工事の作業に出ていました。その頃、1ヶ月の給料が600円以上あったので、兄さんの給料よりも多いと言って母ちゃんは喜んでいました。兄さんの給料は、アメリカのタバコの2ボール分の400円ぐらいでした。

1950年（昭和25）4月、長兄は、初子を高嶺中学校長の高嶺朝賢氏宅へ住み込みの家事手伝いとして送る。高嶺氏の奥方が自宅療養中であり、乳飲み子の末娘もいたからであ

る。

ガスも水道もない時代だったので、朝早くから水汲みと高校生であった長男の弁当作り、家族の食事、そして洗濯など、やることはたくさんありました。洗濯は、近くの川でしていました。日用品などの買い物も糸満の町まで歩いて行きました。時々、古新聞や古雑誌などを店に持って行き、品物と交換することもありました。奥さんが元気になってからは、いろいろな料理を教えてもらいました。正月料理も全部手作り、2、3日前から準備に取りかかりました。茶碗蒸し、納豆味噌、寿司、海苔巻き、私にとっては何もかも初めての料理だったので大変でした。7品から8品ほど作ったのではないかと思います。正月になると、奥さんの手料理を楽しみに、先生方が一度に7、8名ほどもいらっしゃって、てんてこ舞いでした。高嶺先生には、後に、私の結婚の媒酌人になってもらいました。

初子は、高嶺宅での住み込みを終えると、与座に帰り、与座区の女子青年部長を勤めた(1951年)。初子の証言によると、女子は18名、男子は70名程であったという。青年団の主な活動は、大豆の植え付けや稲の世話などの生産活動であり、それらの収穫をエイサーや運動会などの青年会活動に充てた、という。十代前半から生産活動に従事し家族を支えてきた初子であったが、妹や弟の学校就学を見るにつけ、どうしても学校に通い、手に職を持つことの希望を捨てきれずにいた。初子は芳枝に懇願し、ついに糸満の洋裁学校に通うようになる。半年程の訓練学校のようなものであるが、初子にとっては、当時、足踏みミシンを使い服を仕立てる仕事は、憧れの職業のひとつであった。初子は、洋裁学校修業後もしばらくは職を転々と変えるが、結婚後は、洋裁の技術で生計を営むようになる。

洋裁学校では基礎的なことを教えてもらいました。ミシンの動かし方、操作の方法などでした。もちろん、ミシンなどこれまで触ったこともなかつ

たものですから、慣れるまで時間がかかりました。でも、洋裁学校といっても、学校ですから、ずいぶん息抜きにはなりました。小学校を卒業して以来、戦争や収容所での生活でいろいろあって、自分のことなど、全て後回しでしたから。やはり学校に通うことができ嬉しかったです。学校で使う布地を買うお金もなかったもので、いとこの兄さんの嫁さんが子ども服の生地を出してくれたので、それで赤ちゃん用のベビー服を手縫いで作りました。学校を終えると、那覇の古波津布団店で働きました。ここでは布団や敷布団のカバーを作ったり、枕にもみ殻を入れて作ったりしました。工場が玉城にあったので、そこから綿を持ってきて、店で布団の中に入れて売っていました。新婚さん用でよく売れました。この店のお父さんが母(幼名・モウシ)の恩師だったので、「モウシの娘さん」といって、ずいぶん親切にして頂きました。

◇初子20歳頃—女中奉公(糸満のウミンチュの家)

「現金収入のない農家では出稼ぎをしないと生活ができない」ということで、初子は、知人の紹介で糸満の海人の女中として半年程働いた。その家は、息子が漁に出ているため、年寄りの看病と家族の食事作りが主な仕事であった。初子は、次のように述べている(『芳枝85歳の夏』173～175頁)。

最初は糸満のウミンチュ(漁業に従事する人)の家で、おばあさんが寝たきりだった。その世話と食事の準備など。女子青年会長を終わった頃で半年くらい。泣いて帰った。母ちゃんはそんなに難儀なら帰っておいでといった。給料は500円か600円あった。静子の300円よりは多かった。

次のアイスケーキ屋は白銀堂の近くで、アカノー(魚の行商をしていた糸満の女性)おばあさんの紹介。朝早く起きて八名家族の食事を準備して、子供たちが学校へ行くと大鍋に砂糖を溶かして、缶に入れて、一日何十回も、卸をとりに来る人もいるから。(中略)

その次は、当時香港とのヤミ商売(密輸)をしている家に女中として使われた。廊下もわら雑巾

で洗うくらいきびしかった。主人や家族の食べ物と区別して、女中にはまだ残り物を食べさせていた。「お前たちはあれだ」、といって冷飯・冷汁を出された。だから、少しでも残っていると全部捨てた。「冷飯はないか？」と主人がきくと、「ありません、何も残っていません」と答えた。一杯でも残っていると、それを食べさせるから、捨てていた。みんなが食べ終わってからその残りを食べていた。

◇初子21歳頃一料亭「新橋」での修行

初子は二十歳前後から、与座区内の農業を営む人から求婚が相次いだ。初子は、農家の嫁に行くことも農業そのものにも関心はなかったので、親戚の紹介で、当時のコザの料亭「新橋」で働くようになる。「新橋」は現在の沖縄市のコザ十字路から泡瀬向き50m右手に位置していた大きな料亭であり、島内外の著名人も訪れる程の料亭であった。料亭や質屋、洋裁店などが建ち並び、活況であったコザ十字路境界は、一方では米兵による犯罪も多発していた。『コザ市史』は、1950年代初頭のコザ近郊の様子を次のように描き、また、社会福祉活動に奔走していた、島マスも、下記のように述べている。

…コザ十字路は、照屋を中心に外人相手の飲食店が多くたち、十三号線に沿って移住者も多くなっていく。さらに、本町通りの中通りが池原幸長氏らによって整備され、年を追って映画館もでき、風俗業も軒をならべ、雑貨店、外人相手の洋裁店、旅館、遊技場、質店なども栄えて、後にコザ市といえばまずコザ十字路周辺を考えるという発展ぶりを見せる。(コザ市編『コザ市史』1974年、490頁)

黒人部隊の基地の回りに民家がひしめきあって建っているという状態でした。黒人兵が住居地区に夜昼となく出没し、片ことの日本語で女性の名前を呼びながらうろついていました。

安慶田・室川・嘉間良・越來・胡屋などの地域がとくにひどかったと思います。民家に忍びこん

で、女性に乱暴したという話も毎日のように伝えられました。アメリカ兵にとって、占領地沖縄は無法地帯でした。

女性は安心して外出もできない。家のなかにおいても、いつ米兵が入りこんでくるか分かりません。人びとは自衛手段として、鐘を打ち鳴らして身を守りました。その鐘は、米軍の火炎放射器の酸素ボンベや砲弾のヤッキョウなどでした。婦人を暴行しようとして入ってきた米兵は、この鐘で追い払われたのです。(島マス回想録編集委員会編『島マスのがんばり人生－基地の街の福祉に生きて』1986年、89頁)

初子は、歓楽街・コザにあった「新橋」に職を得、そこでおよそ2年間働いた。初子の記憶によると、「新橋」は大きな平屋造りで2階の別館もあった。平屋の炊事場近くの一 corner の部屋に初子ら数名が住み込みで働いていたのである。板前が2名、初子を含め料理支度3～4名、女給40名程で切り盛りしていた。料理支度や女給の食事は、大鍋に豆腐の味噌汁とご飯、おかずは客の残り物を食していたという。時々、気前のよい客からは“花”と呼ばれるチップが与えられた。100円程のチップが与えられることもあり、それが月3回程あると1ヶ月の小遣いが十分であったという。初子は、「新橋」時代を振り返り、多忙を極めたが他職と比較して高給取りであったことを述懐している(『芳枝85歳の夏』179～180頁)。

はじめてコザというところへ行って、コザ十字路で降りればいいものを、ゴヤで降りたため、ずいぶん歩いた。黒ん坊(黒人たち)がいっぱいいる頃だから、こわくて。新橋は大きな看板が出てすぐわかった。おそろおそろ台所から入って「与座からきている人で、…」と案内を頼もうとしたら、ちょうどその姉さんだった。主人に話してもらい、「下(しも)は足りているから下足番でもさせなさい」ということになった。履物を間違えないように、番号札をお客に渡す仕事で、1月くらい続いた。

「忙しいから、下の加勢をしなさい」といわれて、台所に入った。茶碗洗ったり、コップ洗ったりを、雨靴はいて、ミジグチャグチャしているところで。大林組とか、土建会社が沖縄にきて毎日宴会があった。外人は入らせなかったが、警察とか役所の人たちの予約で、朝早くから中味の準備のため、豚の腑（胃腸）を洗って、ゆでて、切っていた。

給料は月にB円の二千円、それに盆・正月にはボーナスとして二千円あったが、それをもって月に一度、家に帰るのが楽しみだった。コザから与座まで、バスを何度か乗り換えて、与座岳が見えると胸がドキドキしたものだ。当時、那覇の料亭で働く女中が、多いところでも千五百円といわれていたが、私はもらった給料は全部母ちゃんにあげた。ここに二年いた。

料亭「新橋」で働いた初子は、次女の静子とコザ十字路市場内の洋裁店で勤め、その後、静子の結婚を機会に初子自身、自立の道を歩むことになる。妹や弟の就職や大学進学を見届けると、実家のある与座への生活費を入れることも必要ではなくなった。初子自身の生活の自立は、その後から始まった。

◇おわりに—家族を支えるために学業を捨てた初子の戦後の生き様を考える—

初子は、沖縄戦で父を失い、母・芳枝と共に家族の生活を守るために、様々な職業に従

事し、賃金を稼ぎ、家計の足しにしてきた。芳枝にとって初子は、夫に代わり家計を支える大切な家族であり、また、初子はその期待に応えるために、学業を続けることを諦めた。当時の家庭の状況からみても、初子が中学・高校へと進学する経済的なゆとりは全くなく、それらの機会は、年の離れた妹や弟たちが受けることになったのである。こうした初子の10代から20代にかけての自己抑制的な生き方・家族に対する経済的な支援は、のちの妹弟の高校・大学進学を支えた。こうした初子の生き様をみたとき、沖縄戦とそれに続く敗戦後の沖縄における庶民一人ひとりの生活は、当然のことながら個々の戦争体験に大きく規定されてきたのだと思う。

ところで、本稿で述べた初子の生きた時代は、収容所生活から1950年（昭和25）の朝鮮戦争を経て、沖縄島を中心に基地建設が本格的に始まる時期にあたる。この頃は、朝鮮戦争や基地建設、「島ぐるみ闘争」などという、確かに初子の生きた時代には繰り返し強調された文言が飛び交っていたはずであるが、証言の中ではほとんど聞くことはなかった。沖縄に住む者としてけして無関心であったはずではなかったと思われるが、やはり、日々の所用におわれ、これらに対して関心を寄せ、考える余裕がなかった点も、庶民の等身大の生き様のひとつではなかったかと思う。